

「小規模建築物基礎設計例集」5.1節

「小規模建築物基礎設計例集」から事業損失に関連する内容を紹介致します。今回は5章「修復工法」の5.1節「不同沈下の調査および修復工法選定の検討例」の内容についてお届けします。

【5.1節 不同沈下の調査および修復工法選定の検討例】

基礎の設計例集ですが、最後の5章は「修復工法」です。これは基礎の修復に関する問い合わせが多く、これまで修復に対する設計方法を提示した技術基準類がないため、この設計例集に掲載されたものです。

事業損失における修復計画の策定でも考え方は全く同じで、特に地盤変動被害では重要な項目です。

【基礎修復方法の選定の考え方】

修復方法の検討手順は右図の通りです。

障害程度を適正に把握すると共に、不具合事象の発生原因を明らかにして、その原因に応じた修復目的を設定し、修復目的を満足する修復方法を選定する必要があります。

修復方法の選定では沈下修復の要否が重要であり（要否判定については次号）、沈下修復が必要な場合は、沈下の継続対策について、沈下修復を必要としない場合は基礎の耐力向上の必要性について検討し、それぞれに応じた修復方法を選定します。

修復方法は以下をご覧ください。

- ・ 基礎躯体修復工法（第41号）
- ・ 沈下修復工法（第42号）

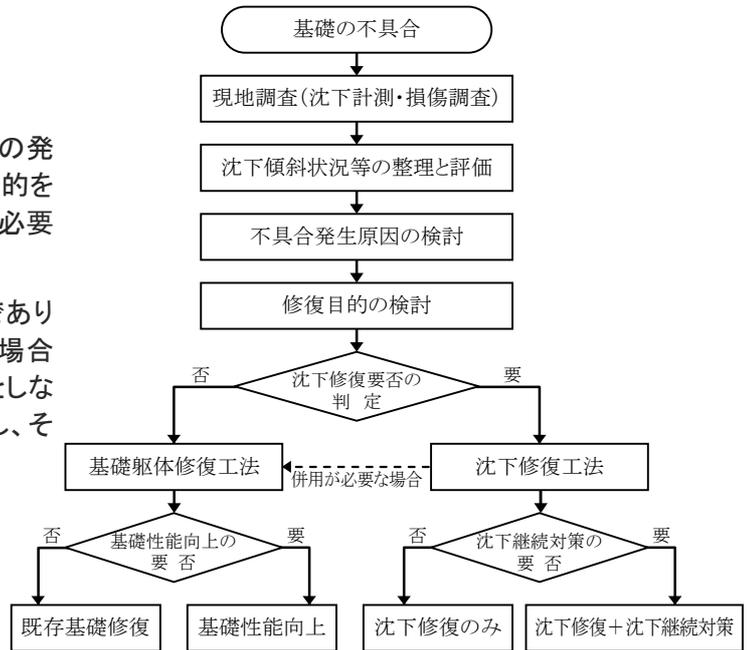


図 5.1.2 基礎修復の検討手順

【沈下傾斜状況等の整理と評価】

沈下傾斜状況等の把握と整理方法は第70号（2011.2月号）でご紹介した通りです。この測定結果から、下表のように各許容値と比較して、沈下傾斜程度を評価します。

表 5.1.3 評価結果例

項目	実測値	許容値*	評価	レベル区分	備考
傾斜角	6.6/1000	6/1000	NG	3	小規模指針表 10.1.1
変形角	2.5/1000	5/1000	OK	2	小規模指針表 10.1.2
沈下量	49 mm	25 mm	NG	—	建築基礎構造設計指針表 5.3.6
鉛直傾斜	7/1000	6/1000	NG	3	品確法技術的基準 ¹⁾
相対沈下量	4.4 mm	10 mm	OK	—	建築基礎構造設計指針表 5.3.5
沈下形状	変形傾斜(軽微)			小規模指針図 10.1.2	
損傷程度	レベル区分 3			小規模指針図 10.1.2	

*建物の状況により上限および下限値を適宜採用する。

【次回予告】

次回はよいよ「沈下修正要否の判定」についてお届けします。